

## 「既存建築物の耐震診断・耐震補強設計マニュアル 2018 年版」講習会

【 質問 ① 】	【 回答 】
<p>必須様式が大幅に少なくなっていますが、例えば構造図やモード図も不要ということでしょうか。</p>	<p>耐震診断に慣れた設計者にとっては、多数の様式を作成することは転記ミスなどを誘発しかねないことから必須様式を縮小しましたが、診断結果を説明するために必要な資料は不要とはなりません。例えばコンクリートの試験結果を示すのに様式6を使用する必要はありませんが、試験結果を示す資料は必要となります。同じように、構造図やモード図は診断結果を説明するのに必要です。</p>
<p>【 質問 ② 】</p>	<p>【 回答 】</p>
<p>棄却検定を行う際、マニュアルに準拠すれば採取本数は4本で良いのですか。</p>	<p>マニュアルでは以前から4本としていますので、マニュアルに準拠する場合は4本でも許容しています。ただし、マニュアルの準拠基準である建防協 RC 基準(2017年版)では6本以上が必要となります。どちらを採用するか、依頼者と十分に協議の上、決定するようにしてください。</p>
<p>【 質問 ③ 】</p>	<p>【 回答 】</p>
<p>様式の形状指標では、弾性剛性のみ対応となっていますが、マニュアルと割線剛性を用いることは可能ですか。</p>	<p>可能です。様式では割線剛性を計算することが難しいため除外しました。なお、割線剛性を用いる場合は電算ソフトを用いることとなると思いますが、建防協 RC 基準 2017 対応の市販電算ソフトが、必ずしもプログラム評価委員会の評価を受けている訳ではないことに注意が必要です。</p>
<p>【 質問 ④ 】</p>	<p>【 回答 】</p>
<p>マニュアル 2018 は建防協 RC 基準 2001 にも対応していますか。</p>	<p>原則として対応していません。建防協 RC 基準 2001 年版に対応するマニュアルは2012年版であり、建防協 RC 基準 2017 年版に対応するマニュアルが2018年版です。</p>

## 「既存建築物の耐震診断・耐震補強設計マニュアル 2018 年版」講習会

【 質問 ⑤ 】	【 回答 】
<p>杭引抜き力による連層耐震壁の検討は、階数による検討の有無はあるのですか。</p> <p>杭の引抜き抵抗が小さいと耐震壁耐力も減少するため、結果として、連層耐震壁があっても <math>I_s</math> 値や <math>C_{TUSd}</math> 値が小さくなり、NGとなります。基礎の補強は難しいと思います。</p>	<p>本マニュアルの改定に伴い、杭の引き抜き抵抗力と極限支持力の算定方法について追加修正しています。</p> <p>ご質問の階数による検討の制限はありません。診断者の判断によるものとなります。</p>
【 質問 ⑥ 】	【 回答 】
<p>上巻 p311 鉄骨柱脚のアンカーボルトの検討で <math>\phi_c</math> : はしあき(C)による低減係数が</p> <p><math>C \leq 100\text{mm}</math> の場合 <math>\phi_c = 1.0</math></p> <p><math>C &gt; 100\text{mm}</math> の場合 <math>\phi_c = 0.75</math></p> <p>となっていますが、はしあきが大きいと低減するのですか。逆ではないですか。</p>	<p>上巻 p310 下から5行の解説にあるように、はしあきが大きくなると耐力が過大に評価されるため、100mmを超えた場合に低減係数をかけるものとしています。</p>
【 質問 ⑦ 】	【 回答 】
<p>弾性剛性としてB法で形状指標を算定した場合、a ~kのうち 2001 年版では項目 a、i、j は 1.0 としていましたが今回の改訂でも同様でよろしいでしょうか。</p>	<p>マニュアル 2012 では、準拠基準である建防協 RC 基準(2001 年版)に <math>F_{es}</math> を用いる場合の記述が特に無かったため、a、i、j を 1.0 として良いとしていました。これに対しマニュアル 2018 では、建防協 RC 基準(2017 年版)に明確に示されたことから、該当部分を削除しました。そのため、マニュアル 2018 を用いる場合は a、i、j の検討が必要となります。</p>
【 質問 ⑧ 】	【 回答 】
<p>モード優遇係数を見直したということで、過去に3次診断からのみ使用できた理由を教えてください。</p>	<p>建防協 RC 基準の改定(2017 年版)による変更であり、コメントする立場にありません。</p> <p>ただし、本マニュアル p.163 1行目からの解説にある通り、2次診断でモード優遇係数を採用する場合には危険側の場合もあるため、注意が必要と考えます。理由としては、梁崩壊形となることを確認できるのは 3次診断法であるからです。</p>

# 「既存建築物の耐震診断・耐震補強設計マニュアル 2018 年版」講習会

【 質問 ⑨ 】	【 回 答 】
<p>鉄骨柱脚の側方破壊の検討で、 p.311 9 行目 <math>qa2 = 0.4 \times \sqrt{\sigma B} \times Ec \times sca</math> とありますが、 <math>qa2 = 0.4 \times \sqrt{\sigma B \times Ec} \times sca</math> の間違いですか。</p>	<p><math>qa2 = 0.4 \times \sqrt{\sigma B \times Ec} \times sca</math> が正です。</p>